

日本細菌学会 関東支部ニュース

第32号

第80回日本細菌学会関東支部総会のご案内

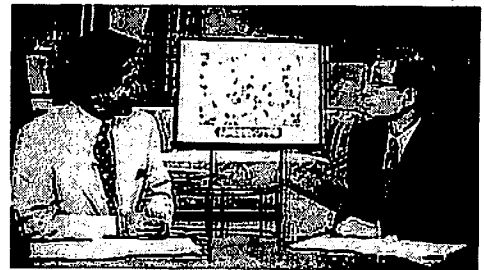
従来知られていなかった新たな感染症（新興感染症）の出現と既に消えたかに見えた既知の感染症（再興感染症）の流行が、世界的脅威となって来ております。この国際的に人の動きが活発な時代に、その対応を誤まれば、これら感染症は世界的規模で流行する危険性があります。今日、かかる感染症の制圧は社会的に強く要請されているところであり、その発病機構の解明と共に、新たな発想に基づく治療剤の開発と予防法の確立が強く望まれています。この様な状況の中で、第80回という佳節を迎えた関東支部総会を開催することは身の引き締まる思いで一杯であり、また意義ある学会にすべく、鋭意努力しているところであります。

特別講演としては千葉大大学院医学研究科免疫発生学の谷口 克 教授に「胎生期から出現する新しい免疫系：V α 14NKT細胞」と題してご講演をお願いしております。先生の発見されたこの新たなリンパ球系列に属するNK T細胞の発生、分化とその免疫系における意義についてお話し頂き、感染免疫学を理解する上で大変示唆に富むご講演になるものと期待しております。

シンポジウムの一つに「新興・再興細菌感染症の現状と研究の進歩」を取り上げました。企画と司会を内山竹彦教授（東京女子医大微生物免疫）と丸山務教授（麻布大環境保健学部）にお願いし、食品を介しての人獣共通感染症、腸管出血性大腸菌感染症をはじめ、ヘリコバクター感染と胃病変、黄色ブドウ球菌による新生児感染症、劇症型A群レンサ球菌感染症、さらには結核の現状と結核菌研究の進歩など、話題の感染症を幾つか取り上げて頂き、

日本医科大学老人病研究所免疫部門

大国 寿士



その研究の現状とこれからの対策について論じて頂く予定です。

また、今回は第47回日本感染症学会東日本地方会総会（会長：国立東京第二病院小児科砂川慶介部長）と第45回日本化学療法学会東日本支部総会（会長：日大医学部第三外科岩井重富教授）との合同でシンポジウムを企画し、「腸管感染症の基礎と臨床」と題し、井上松久教授（北里大医学部微生物）と入交昭一郎先生（川崎市立病院院長）に企画と司会をお願いしております。バンコマイシン耐性腸球菌の出現と共に感染性腸炎や食中毒としてのサルモネラ感染症が話題となっているだけに、先生方の期待に応えるシンポジウムになるのではないかと考えております。昨年（平成7年）の第78回支部総会（会長：国立小児医療研究センター感染症研究部竹田多恵部長）ではこの三学会が同一会場で、同時開催し、従って、先生方の会場での移動もスムーズに行われ、感染症学会東日本地方会の入交会長と化学療法学会東日本支部総会井上会長のご協力もさることながら、竹田会長は見事な学会運営をされ、合同シンポジウムは大変スムーズに行われました。しかし、第80回支部総会においては諸般の事情に

より、二学会と同一会場で、同時開催することが出来ず、合同シンポジウムでは会員の先生方にかなりのご迷惑をおかけすることになります。

第80回支部総会は平成10年11月25、26日の2日間を予定し、四ツ谷駅（JR中央線、地下鉄丸ノ内線）前の「スクワール麹町」が会場となります。四ツ谷駅麹町口から徒歩2分のところにありますので、大変便利のよい所です。第一日目午前是一般演題の発表をして頂き、午後は総会に引きつづいて、特別講演を谷口克教授にお願いし、次いで、シンポジウム「新興・再興感染症の現状と研究の進歩」を開催し、午後6時過ぎから懇親会を予定しております。

第81回日本細菌学会関東支部総会に向けて

順天堂大学医学部細菌学教室

平松 啓一

今回、第81回細菌学会関東支部総会をお引き受けし、1999年6月2、3日順天堂大学有山記念講堂で開催することになりました。昨年より、バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌（VRSA）による感染症が、日本で1例、アメリカで3例、フランスで1例と報告され、いずれの株もMRSAであったことから、もはや、MRSA感染症一般に一剤で有効な抗菌薬はなくなりました。さらに、VRSAをspontaneousに生み出すhetero-VRSAの概念が定着し、その検出法の開発が、世界中の研究者により研究されるようになりました。さらに、追い打ちをかけるように、本年から日本全国各地の病院でバンコマイシン耐性腸球菌（VRE）が検出され、現在調査中ですが、すでにかんりの拡がりを見せているようです。VRSA、VREの登場により、病院内感染対策は、ますます困難をきわめることとなります。こういった状況に対応して、病院内感染を制御するために、医療従事者は、どのように考え、どのように行動したらよいのか？という問題を討議する機会として、今回の支部総会を組織したいと思います。アメリカでのVRSA、VRE感染の実地疫学調査の経験

第二日目は午前と午後の一部を一般演題とし、午後3時半には会場を東京プリンスホテルに移し、三学会合同のシンポジウム「腸管感染症の基礎と臨床」を開催します。先生方にはご面倒でもそちらに移動して頂くこととなります。この関連学会との合同シンポジウムの開催は“学会の活性化”を図ることを目的としており、これはまた、“研究の活性化”でもありますので、基礎と臨床の先生方が互いに議論し合い、実りあるシンポジウムになればと期待しております。この合同シンポジウムは細菌学会支部総会のネームプレートで参加出来ることになっておりますので、多数の先生方のご参加をお待ち申し上げます。

をCDC（Center for Disease Control and Prevention）の専門家から話してもらいます。VREは、病院内感染菌として、MRSAとは全く異なった性質を持っています。まだ、我が国の医療従事者のほとんどがVREを経験していないため、VREの院内感染対策に詳しいアメリカの専門家に、実際の対策の経験談をうかがおうと思います。これらの話しは、公開講座として、関東支部会会員以外の、看護婦、技師、臨床医、一般の方で関心のある方に、広く聴講していただく予定です。

病院内感染対策のもう一つの側面は、「抗生物質の適正使用」です。この「適正」という意味不明な単語を、シンポジウム「21世紀の化学療法の概念」として具体的な概念に置き換えます。このための、シンポジストとして、幾人かは関東支部会以外からも招聘いたします。

さらに、もちろん細菌の側の研究も重要で、「病院内感染菌の耐性メカニズム」の研究の進展も特集する予定です。今回の総会は、以上のように、新しい段階に入った病院内感染を徹底的に討論する場とします。会員の皆様には、奮って演題を出されることを願っております。

日本細菌学会関東支部総会に関する提案

－春と秋の支部総会の統一化について－

日本細菌学会関東支部長

内山竹彦

日本細菌学会関東支部長と評議員会は、春と秋に2回開催されていた関東支部学術総会を平成12年度より年1回の開催に統一化することを提案いたします。

関東支部総会は、これまで昭和22年（1947年）から脈々と運営されてきており、最近では日本細菌学会の再活性化の場としてさまざまな試みもなされました。これからも関東支部総会の重要性は不変と思われれます。しかし、現在、支部総会は活力を失いつつあると憂慮されます。わたくしと関東支部評議員会は、支部総会のあり方について評議員会で慎重に討議を重ね、上記の提案を考えるに至りました。討議の経過は、日本細菌学会第2回、第3回関東支部評議員会議事録（本支部ニュースに掲載）に記録されています。

最近十数年間の関東支部総会の現状を考えてみましょう。各支部総会の演題数が少なく個別に出題を依頼せざるを得ないことや、各支部総会への出席者が100人に満たないことがしばしば見られました。シンポジウムでも外国の研究者を含め会員外の演者は少ないようです。これらの理由として、演題の出題者の側からは、春の総会は本部の総会と開催期日が近く演題の内容が重複することや、関連分野の研究会や学会が数多く開催され、さらに学会期日も重なること等があげられます。演題を聴講する側からは、本部総会と支部総会の演題内容に本質的は違いが見られず、参加により得られる学問的メリットが少ないという学術集会の本質に関する問題点があげられます。特に春の総会についてはこの傾向が強いです。学会開催の予算面では、現在それぞれの支部総会への関東支部からの援助は限られた額であり、学会参加者からの参加費も少額であり、さらに最近の傾向として企業からの支援が減少傾向にあること等があげられます。

それでは関東支部総会を秋1回に統一したと

き、どのようなメリットとデメリットが生じてくるでしょう。本部の総会と支部総会の間隔が離れるので内容のある演題がより多く準備できること、本部総会の内容を考慮してシンポジウムのテーマを補完したり、口頭発表やポスター発表のバランスをとったりして、特徴ある支部会とすることができます。さらに、総会開催の予算面では、関東支部からの予算の増加や企業からの支援も受け入れ易くなることなどにより、規模の大きい会場の設定や外国人を含めた会員外の演者の招聘など、より幅の広い学術集会が可能となります。デメリットとして、関東支部会が擁する数多くの学問分野を背景とする会員各位の要請をカバーすることが現状より困難になることがあげられますが、1回の支部総会会期を十二分に活用することで克服できると思われれます。

以上の事柄を総合して、平成12年度より支部総会を1回にすることは日本細菌学会関東支部の活性化のために適っていると考えられます。年1回になった支部総会がより活力あるものになるためには、総会長と評議員会の選任によるプログラム委員会の設定など、出来るだけ広く支部会員の意見を吸収するシステムの採用が望まれます。さらに、これまでの春の支部総会に代わる不定期の関東支部主催の研究会やシンポジウムの企画も検討課題としてゆかねばならないでしょう。

支部総会を一本化することは、これまでの伝統を変えることでありますので、支部会員各位におかれましては、十分にお考えいただき、同封の葉書にて皆さまのお考えをお知らせください。お考えは評議員会において集計し、平成10年11月25日の第80回関東支部総会時の会務総会でお知らせします。統一化案について皆さまの支持が多ければ、審議事項として提案してご承認を求める予定です。第80回支部総会ならびに会務総会へ支部会員の皆さまのご出席をお願いいたします。

フォーラム

本号の「フォーラム」では結核菌を取り上げてみました。第80回支部総会のシンポジウムでも講演される水口康雄先生を中心に、最近の結核菌研究の動向について3人の先生方に書いていただきました。支部総会において、この議論の続きが活発に行われることを期待します（編集委員会）。

結核菌の分子遺伝学の進歩

千葉県衛生研究所

水口康雄

アメリカ微生物学会発行のASM Newsによると、この数年間、抗酸菌（結核菌を含む）関係の論文が微生物関係学術雑誌に掲載される頻度は約6%で、高い方から数えて5~6位にランクされるということが記されている。この中で分子遺伝学的研究がどの程度の割合を占めているかは不明であるが、10年ほど前は極めて少数の論文しか散見されず、月に数編の論文を読めば自分の興味ある領域を十分にカバーすることができたことを考えると隔世の感がする。今年になって結核菌の全ゲノムの構造も発表され、この傾向に益々拍車がかかることが予想される。長らく抗酸菌の研究に携わってきた者としては喜ばしい限りであるが、これらの進歩に一応目を通しておくだけで大変なエネルギーが必要になってきたことも事実である。

このように結核菌に関する研究論文の発表がまさにoutbreakの状態になってきたのは、結核が未だに世界で最大の感染症であることが再認識されたことにもよるが、分子遺伝学的な研究の領域においては、一般に大腸菌等で用いられる解析の手段の殆どのもが結核菌でも利用可能になってきたことが大きいと考えられる。また、診断の面においても、核酸を用いた早期診断のためのキットが既に日常的に用いられているし、同じく核酸のホモロジーをベースとする菌の同定のためのキットも市販されており、それまで2ないし3ヶ月を要していた同定・感受性試験を3週間以内、遅くとも4週間以内に終了させる事が可能になってきた。

分子遺伝学の領域の中でも特に進歩が著しいのは、おそらく薬剤耐性の機序の解明であ

ろう。この5年ほどの間に現在用いられている抗結核剤の殆どのもに対する耐性の遺伝子レベルでの機序が明らかになってきた。いずれも染色体遺伝子の変異による耐性化であり、プラスミドの獲得による耐性は今のところ知られていない（結核菌にはプラスミドは存在しないと考えられている）。最近われわれもkanamycinおよびviomycin耐性菌について調べた結果、いずれも16S rRNA遺伝子のある特定の部位に生じた変異が耐性の表現に関与していることを明らかにする事ができた。そのほか、BCGより優れた結核ワクチン、多目的ワクチン開発の研究、病原因子の解析など、興味を引く領域の研究が目白押しの状態である。残念ながら我が国の研究者で、この新しい領域で活躍をしている人は極めて少ない。これからでも遅くない。結核の研究に情熱を傾ける若い人が出てくることを待ち望んでいる。

結核の分子疫学

—分子生物学と疫学の出会いから今後の展開—

(財)結核予防会結核研究所細菌学科

高橋光良

1991年に結核菌にランダムに存在する挿入断片 (IS) 6110が発見された。このIS6110の転移頻度は動物継代および薬剤耐性パターンが異なる結核菌でも同一感染源の株は同一パターンであることが示された。このような分析方法は結核菌のみならず、大腸菌O-157、MRSA、カンジダ属で行われている。当所では、結核の疫学的研究を精力的に行い公衆衛生に貢献した経緯がある。その流れの中でIS 6110をプローブとした分子疫学は感染源追跡、再感染・再燃の区別、薬剤耐性菌の分布等を実験的に証明するための有力な手がかりを与

え、より説得力のある分析法になった。近年、新聞紙面・TV等で全国的に結核集団発生が報じられている。結核蔓延時代には大部分の人が結核既感染者で結核に対する免疫を保有していたが、今では40歳以下ならば結核未感染者であると考えられる。このために、結核は感染症たる様相を強めてきている。一方、多剤耐性結核菌による集団発生事例・院内感染事例も報告されてきている。これまでの考えではヒドラジド (INH) 耐性菌は人に対して感染性を持たないと考えられてきた。しかし、IS6110を用いた分子疫学の結果、INH耐性結核菌でも感染しうることが示された。この様なバックグラウンド下でDNAフィンガープリントで同一感染源か否か分析を行い、結核対策に寄与しておりますが、分析依頼件数も全国的に増加しており都道府県での結核対策への関心が高いことが分かります。

今後の展開は全国的に本法を広めて検出されたフィンガープリントをコンピューター化して比較検討を行うことである。そのためのトライアルを沖縄県との共同研究で沖縄で発生した結核患者由来株を全て分析して疫学的に追跡している。この一連の流れの中でどの様な感染経路があるのかを研究して結核対策上の問題点を検討することから始めている。しかし、全国レベルで行うとすると患者数が43,000人/年で培養陽性は少なくとも半数以上であることや患者の移動が加わり難しい。さらに、結核の研究は3K(危険・汚い・きつい)のイメージが強いため全国的に見ても研究員数が少ないことがこの分析での将来的展開を妨げている。

抗酸菌免疫学における最近のトピックス

島根医科大学 微生物・免疫学教室

富岡 治明

最近、*adh*、*dnaA*、*hrd*などの遺伝子群をマーカーとしての結核菌 (MTB) のゲノム解析の結果、H37Rv株の全ゲノムの解読が完了した。その結果、結核菌のゲノム(4,411,529塩基対)には3,924個のORFが存

在するが、このうち遺伝子産物の機能の特定や推定が可能なORFが84%程度を占め、残り16%のORFはその機能が不明であり、MTBにのみ特異的な遺伝子であることが明らかになった。MTBのビルレンスは、基本的にはマクロファージ (MΦ) 内での増殖力あるいは生存力といったいわゆる菌の侵襲性にかかわる因子によって規定されている。MTBはMΦ内での活性酸素 (ROI)、活性酸化窒素、lysosome内の殺菌蛋白などによる殺菌メカニズムに対する抵抗性が極めて強い。このような病原因子として、*urease*や*superoxide dismutase (SOD)*、*catalase*などをコードする遺伝子 (*ure*、*sodA*、*katG*) や、MΦなどへの侵入性・細胞内増殖性を付与する *mce* 遺伝子などがクローニングされている。MTBのゲノム上には、これらの遺伝子に加えて、細胞膜やphagosome膜などへの障害に関わると考えられる*phospholipase C*、*esterase*、*lipase*、種々の*protease*などの遺伝子 (*plc*、*lip*、*gcp*、*hfl*、*htr*、*map*、*pep*など) もマッピングされている。さらに、MTBのゲノム上には*ferritin*様の蛋白をコードする*bfrA*、*B*遺伝子の存在も認められるが、これは宿主MΦのBCGやMTBなどに対する抵抗性を支配する*Nrapml*遺伝子の役割を考える上で興味深い。すなわち、*Nrapml*蛋白はアミノ酸配列からすると、 Fe^{2+} 、 Mn^{2+} などの2価の金属イオンのtransporterファミリーに属する可能性が示唆されており、この蛋白の働きによって、phagosome内から菌の増殖に必須な Fe^{2+} や、phagosome内でのROIの殺菌作用に抵抗するためのSODや*catalase*の活性発現に必須な Fe^{2+} や Mn^{2+} が汲み出されることになる訳で、それに対抗するための*ferritin*の役割はMTBのMΦ内での生き残りに極めて重要であるからである。但し最近、*Nrapml*遺伝子の役割が、MTBを取り込んだphagosomeへのV-ATPase陽性のlate endosomeやlysosomeの融合、ひいてはphagosomeのacidificationの促進作用にあるとする成績が報告されており、この問題についての最終決着には今後の研究の進展が大いに望まれるところである。

集 会 案 内

○第32回腸炎ビブリオシンポジウム

日 時：平成10年11月27日（金）～28日（土）
場 所：アルカディア市ヶ谷（私学共済会館）
（東京都千代田区九段北4-2-25）
世 話 人：久恒和仁 城西大学・薬学部微生物学教室
問 合 せ 先：城西大学・薬学部微生物学教室内 事務局 近藤誠一
TEL 0492-71-7673、FAX 0492-71-7984

○第5回ローベルトコッホ研究所・北里研究所合同シンポジウム

日 時：平成10年11月18日（水）
場 所：北里研究所（東京都港区白金5-9-1）
問 合 せ 先：社団法人 北里研究所 研究業務調整室
TEL 03-5791-6119、FAX 03-5791-6120

○第33回緑膿菌感染症研究会

日 時：平成11年2月5日（金）～6日（土）
場 所：順天堂大学有山記念講堂（東京都文京区本郷2-1-1）
会 長：猪狩 淳 順天堂大学医学部臨床病理学教室
問 合 せ 先：順天堂医院臨床検査部微生物検査室内 事務局 小栗豊子
TEL 03-3813-3111内線5186、FAX 03-3813-0293

○第14回日本環境感染学会総会

日 時：平成11年2月26日（金）～27日（土）
場 所：名古屋国際会議場（名古屋市熱田区熱田西1-1）
会 長：品川長夫 名古屋市厚生院（名古屋市名東区勢子坊2-1501）
問 合 せ 先：名古屋市厚生院医局内 事務局 鈴木幹三、真下啓二
TEL 052-704-5475、FAX 052-704-2785

○第29回嫌気性菌感染症研究会

日 時：平成11年3月6日（土）
場 所：大分市 トキハ会館
一般演題締切：平成10年12月18日
会 長：那須 勝 大分医科大学内科学第二講座
（大分県大分郡狭間町医大ヶ丘1-1）
問 合 せ 先：大分医科大学内科学第二講座内 事務局 平松和史
TEL 097-586-5804、FAX 097-549-4245

○第12回臨床微生物迅速診断研究会総会

日 時：平成11年6月19日（土）～20日（日）
場 所：松山市総合コミュニティセンター
一般演題締切：平成11年3月31日
会長および問合せ先：村瀬光春 愛媛大学医学部検査部
（愛媛県温泉郡重信町志津川）
TEL 089-960-5593、FAX 089-960-5627

○第13回Bacterial Adherence研究会

日 時：平成11年7月17日
場 所：鹿児島市 サンロイヤルホテル
一般演題締切：平成11年5月31日
会長および問合せ先：大井好忠 鹿児島大学医学部泌尿器科
（鹿児島市桜ヶ丘8-35-1）
TEL 099-275-5395、FAX 099-265-9727

海外会員便り

元国立小児医療研究センター・感染症研究部

吉野 健一

平成9年秋より、ドイツ・ハノーファー医科大学生化学研究センターHeiner Niemann教授の元での研究生生活が始まりました。ボツリヌス神経毒素および破傷風毒素の毒性発現機構に関する研究と、毒素の標的分子となるSNARE蛋白質の作用機構に関する研究を進めています。神経生物学や細胞生物学の先端を走っているトピックとオーバーラップする部分が多く、次から次へと関連する研究成果がハイランクのジャーナルに発表されます。それらをフォローするだけでも大変な仕事です。論文に発表された結果をふまえて次の仕事を考えては既に遅すぎ、その先を考えて研究を進めなくてはならないとてもハードな分野です。

最近ヨーロッパの研究者のノーベル賞受賞は少なくなっていますが、それでも日本よりは、はるかにノーベル賞学者を身近に感じることができます。ハノーファーに来て一年も経っていませんが3人のノーベル賞学者に会うことができました。そのうちの1人とは一緒にピザを食べながらお話しする機会まで持つことができました。彼の研究室はとても

こぢんまりとした部屋で、スタッフがたくさんいる大きな研究室だろうという私の想像を見事に裏切ってくれました。小さな研究室からノーベル賞を受けるような立派な成果が出たことに感銘し、思いを新たにしました。

ハノーファー医科大学では臓器移植が盛んに行われています。そのため臓器輸送用のヘリコプターとヘリポートが備えられています。急患の輸送にも利用されていて、6月にハノーファーの近郊で起きたドイツ新幹線の事

故の際には多くの急患がこのヘリポート経由で大学病院に運び込まれました。日本からの留学生も何人かいらっしゃいますが皆さん外科医で臓器移植に関する研究に従事されています。

ドイツ人は散歩とハイキングが大好きです。Prof. H. Niemannもよく週末に出かけていますが、先日、私が所属する生化学研究センターのハイキングに参加しました。このハイキングは大学の公式行事で、かつては大学が必要経費をまかなっていました。東西ドイツ統一後は緊縮財政のため経費の援助はなくなりましたが、参加者はこのために休暇を取る必要はありません。今年は旧東西ドイツの国境にあるハルツ山地に出かけました。ここはかつて東ドイツのレーダー基地があり一般の人の立ち入りは禁じられていました。ゲートの「ファウスト」の舞台となった場所であり、また最高峰ブロッケン「ブロッケン現象」の語源となった山です。公私共に新しい経験ばかりですが、ここで「何か」をつかんで帰りたいと思います。



写真：ハルツ山地でのハイキングの際撮影した記念写真。左から4人目がProf. H. Niemann、中央上が田村照子さん(Niemann夫人)、その間が著者、左から2人目がDr. T. Binz。

第79回日本細菌学会関東支部総会報告

東海大学医学部 分子生命科学部門

中江 太治

1998年7月10日(金)、11日(土)二日間、神奈川県大井町“いこいの村あしがら”で第79回日本細菌学会関東支部総会を開催しました。この総会の企画としては“若手研究者による若手研究者の学会”をメインテーマとして掲げその主旨に添って学会の運営を試みて参りました。その主たる目的は次世代の細菌及び感染症研究者の育成を目的としたものであることは言を待たないところです。従いまして支部会としては多目のシンポジウムを企画し、シンポジストの人選からシンポジウムの進行まですべて30才代の研究者に行ってもらいました。前宣伝が効いたのかどうか、約90名の若手研究者の参加がありました。会長の前宣伝の仕方が良くなかったのかも知れないが比較的確立された研究者の参加は予定よりも少なかったように見受けました。

さて、学会は4つのシンポジウムと一般演題から構成されました。シンポジウムは比較的親しみ易いテーマをあえて選びました。それらは“感染と宿主応答”、“細菌の毒性と病原体”、“化学療法の新しい問題点”及び“新しい感染症と古くてあたらしい感染症”の4つのシンポジウムでありました。約50名

程度を収容できる比較的小さな会場でシンポジウムを行ったせいか、演者と聴衆の距離が近く質問者なども自由に手をあげ椅子に腰をかけたまま、マイクをなしで自由に発言する様子が見られました。この点は比較的小さなシンポジウムで良かった点ではないかと考えます。一般演題は約15題の発表がありましたが、これもほとんどの発表者は20代～30代の研究者が多かったように見受けました。

新しい試みとして午後の時間を自由時間とし、スポーツ、レクリエーションを楽しみ頂くよう企画をしました。参加者も全員ではありませんでしたがテニスを楽しむ人、ジョギング、山歩きを楽しむ方を見受けました。また会場には宿泊施設も備わっていたことから、多くの方にお泊まり頂きました。夕食を兼ねた懇親会、それに続く二次会なども、帰る心配をしないで楽しみ頂けたように見受けました。このようにいくつかの新しい企画をしてそれを実行し第79回日本細菌学会関東支部総会を閉じました。会長の任を終わった感想としては、今回の新しい試みが少しでも若い研究者の励みとなり成長される事を祈るのみです。

評議員会からのお知らせ

－ 議事録付記について －

日本細菌学会関東支部ニュース第31号9ページに掲載された、平成9～12年第1回日本細菌学会関東支部評議員会の議事録の一部(項目5:新旧評議員の引継時期について)について、支部長の事実誤認にもとづく不適切な表現があり、吉川昌之介前支部長からご指摘を受けた。この放置は今後の支部活動の運営にも影響をきたすと思われるので平成10年7月8日の第3回評議員会で検討した。その結果、当該議事録項目5の不適切な表現に対し

て以下の付記事項を第1回評議員会議事録に追加することにした。なお本件に関して、内山支部長から、前支部長、前評議員各位、そして関東支部会員各位に陳謝の意が表明された。

付記事項

第1回評議員会議事録(日本細菌学会関東支部ニュース第31号9ページ)項目5:新旧評議員の引継時期について

下記の議事録の下線部分1、2、3に不適切な表現があったので、以下に補足説明を行う。

「現在、会計年度は10月1日から翌9月30日となっているが、1慣例から現評議員の任期は平成12年10月ないし11月の評議員会をもって終了する予定であり、2次期評議員会に引き継ぐ時にはすでに予算が決定されていることになり好ましくないのではないか、との問題提起が内山支部長よりなされた。できれば、評議員の任期は9月までとし、また、3次期予算について新評議員会がある程度関与できるような形が望ましいと思われるので、今後の検討課題とすることとなった。」

下線1 評議員の任期は会則に明文化されていないが、新旧評議員交代年度の秋の支部学術総会時に開かれる最後の評議員会までとするより、会計年度に準じ、9月末日までとするのが妥当であると考えられる。従来、秋の支部学術総会時に開かれる評議員会と会務総会は旧評議員の担当となっているが、これは秋の学術総会の会計年度内開催を総会長に

強いることを避ける措置と解釈することができる。

下線2 次期評議員への予算案を含めた会務の引き継ぎは、秋の支部学術総会時の最後の評議員会以前に開かれる新旧合同評議員会にて行われ、学術総会時の会務総会にて予算の承認が求められる。新旧合同評議員会の開催時期は原則として会計年度内即ち、9月中であり、これまでの日程の都合上やむを得ず10月になることもあった。なお前回の新旧合同評議員会は平成9年9月27日に行われ、監査を経て次期繰越金は任期満了前の平成9年9月30日に新支部長の銀行口座への振込の手続きがとられた。

下線3 新旧評議員交代年度の予算案作成は新旧合同評議員会において新旧評議員の合意のもとに行われるので、新評議員が予算案作成に関与できていると考えられる。さらに幾人かの評議員は2期重任しているので、前年度の支部会の会計は十分な理解のもとに引き継がれていると考えるべきである。

議 事 録

平成9～12年日本細菌学会関東支部 第2回評議員会 議事録

日 時：1998年5月23日（土）、午前10時～12時

場 所：東京女子医科大学中央校舎 1F 会議室

出席者：安部茂、今西健一、内山竹彦（支部長）、梅本俊夫、大国寿士、小原康治、加藤哲男、川原一芳、佐竹幸子、笹川千尋、田中重則、平松啓一、丸山務、森田耕司、宿前利郎、山田澄夫、加藤秀人（幹事）

欠席者：奥田研爾、笹原武志、益田昭吾、松浦基博、山口恵三、渡辺治雄

1. 総会準備状況について

(1) 第79回日本細菌学会関東支部総会（夏）：中江総会長（欠席）より順調に準備が進んでいる旨の報告をうけたことが支部長より報告された。

(2) 第80回日本細菌学会関東支部総会（秋）：大国総会長より順調に準備が進んでいる旨、報告された。日本化学療法学会東日本支部総会（総会長・岩井重富先生）と日本感染症学会東日本地方会総会（総会長・砂川慶介先生）との合同シンポジウムも開催

される。細菌学会員は、関東支部総会参加のネームプレートで3学会合同シンポジウムに参加できる。

2. 平成10年度の予算について

前回の評議員会に引き続き内山支部長より説明があり、異議なく了承された。

3. 各委員会報告

(1) 編集委員会：下記の報告があった。

関東支部ニュース第31号の印刷が終了した。内容については、「フォーラム」、「海外会員便り」などの新しい試みがなされた。

(2) 合同学会委員会：下記の報告があった。平成10年3月16日、3学会合同シンポジウムに関する協議がもたれ、日本化学療法学会東日本支部長 斉藤篤先生、第45回同支部総会会長 岩井重富先生、日本感染症学会東日本地方会支部長 嶋田基五郎先生、第47回同地方会総会会長 砂川慶介先生、それに日本細菌学会関東支部長 内山竹彦、第80回同支部総会会長 大国寿士（合同学会委員会委員長）、山口恵三（合同学会委員会委員）が出席した。3学会合同シンポジウムの開催は学会活性化のうで互いに必要であるという認識で一致し、シンポジウムの内容や参加形態等については、そのつど3学会総会長間で話し合って決めることになった。

合同学会は当初2年に1回ほどの開催を予定していたが、現在のところ、今秋開催の第80回総会まで連続3年続いた。平成11年の感染症と化学療法の2学会が東京で開催されることから、平成11年の3学会合同シンポジウムについても話し合いをする計画である。なお、平成12年は上記2学会は関東以外の地域での開催の可能性が高いので、3学会合同シンポジウムは開けないようだ。

(3) 将来計画委員会：これからの関東支部総会の活性化について報告があった。その概要は、「他学会との連携、若い研究者の育成、社会への貢献、情報発信などに力点をおき、支部総会を特色ある学術会議とする方向で今後さらに検討する」というものであった。

(4) 学術委員会：支部総会のあり方について、支部長より学術集會委員会に諮問があり、それに対する答申が報告された。その概要は、「現在、関東支部総会は春期秋期に2回開催されており、とくに春の支部総会は本部の総会の2～3カ月後であって、準備期間が非常に短い。秋の支部総会に集中すれば、参加者も多く充実したものになることが期待されるので、年1回にすることを提案する。ただし、支部総会を活性化するために、不定期に若手演者によるシンポジウム形式の催しを行うことや、秋の支

部総会をより一層充実させ、3学会の合同学会あるいは合同シンポジウムを充実させるなどの検討が必要である。」というものであった。

4. 関東支部会員の日本細菌学会会費滞納について

平成10年4月3日の日本細菌学会総会時の支部長会で、会費滞納者が多いとの報告があった。これを受けて関東支部会員の会費滞納を減らす方策が今後の検討課題となった。

5. 関東支部が支援する研究会について

関東地方で開催される規模の小さい細菌学関連の研究会について、一件あたり数万円（2万円程度）、全体としては10万円程度の補助が継続されることが了承された。

6. 文部省科研費の申請について

支部長より、支部会員による文部省科研費細菌学関連部門へのより多くの申請が必要ではないかとの提案があり、いかに申請を増やすかを今後検討することになった。

7. これからの支部総会のあり方についての討議

(1) 将来計画委員会報告と学術集會委員会からの提言（前述）をうけて、将来の支部総会のあり方について討議がなされ、支部総会は年1回が望ましいとの意見が支持されたが、次回の評議員会でこれまでの経緯も踏まえて再度討議することになった。

(2) 年1回の支部総会になったときは、特色ある学会スタイルを創っていくべきであるとの意見が出された。この件について、将来計画委員会ですらに検討することになった。

(3) これからの支部総会を活性化するために、会員外の人々の参加について意見が出され、その方法について討議された。具体的には、インターネットを利用した一般社会向けの広報の拡充、細菌検査部門や看護部門などの医学関連分野での非会員への働きかけ、また、特色あるシンポジウムの開催などが提案された。

（本議事録は平成10年8月14日に評議員回覧により承認されました。）

平成9～12年日本細菌学会関東支部 第3回評議員会 議事録

日 時：1998年7月8日（水）、午後2時～5時

場 所：東京女子医科大学中央校舎1F会議室

出席者：今西健一、内山竹彦（支部長）、大国寿士、奥田研爾、小原康治、加藤哲男、川原一芳、笹原武志、笹川千尋、佐竹幸子、田中重則、松浦基博、山田澄夫、山口恵三、加藤秀人（幹事）

欠席者：安部茂、梅本俊夫、平松啓一、益田昭吾、丸山務、森田耕司、宿前利郎、渡辺治雄

1. 議事録付記に関する討議

第1回日本細菌学会関東支部評議員会議事録の一部（項目5：新旧評議員会の引き継ぎ時期について）について討議され、議事録付記を関東支部ニュース第32号に掲載することになった。

2. 3学会合同シンポジウムについて

内山支部長より、平成12年度の3学会合同シンポジウム開催の進行状況について報告があった。日本細菌学会関東支部総会（総会長、筑波大学林英生先生）、日本化療学会東日本支部総会（総会長、慶応大学相川直樹先生）、日本感染症学会東日本地方会総会（総会長、東京大学木村哲先生）の3学会主催の合同シンポジウムは、現在開催の方向で3学会総会長のあいだで話し合いが進行中である。

3. 春・秋関東支部総会の統一化に関する将来計画委員会報告

第2回評議員会での学術集会委員会報告、評議員間での議論により、支部総会は年1回が望ましいという提案がされた。この提案をふまえて、将来計画委員会で検討が行われ、その内容について以下の報告がなされた。

ア 現状の確認

- 1) 各支部総会の演題数が十分確保できず、会員個別に出題を依頼せざるを得ない場合もしばしばみられる。この理由のひとつとして、春の支部総会は本部の総会との間隔が短かく演題の内容が重複することがあげられる。
- 2) 年に2回の総会開催には予算が十分ではない。
- 3) 支部総会への出席者は、毎回100人前

後であり、あまり盛況とはいえない。このことの理由として以下の点が考えられる。最近は専門分野別の研究会、学会が数多く開催され、集会の期日が重なることもある。また、本部総会と（特に春の）支部総会の演題内容にあまり本質的な違いが見られず、参加により得られる学問的メリットが少ない。

イ 春秋総会の統一化案の検討

1) 統一化することにより得られるメリット

- a 本部総会と支部総会の開催日が離れることにより、内容のある演題がより多く準備できる。また本部総会の内容を考慮して、シンポジウムのテーマを補完したり、口頭発表やポスター発表のバランスをとったりして、特徴ある支部総会とすることができる。
- b 2回の支部総会の予算を1回に集約できることで、支部総会の総予算が多くなり、会場費や外国人招請費などの点でより質の高い学術集会を準備できる。

2) デメリット

細菌学会関東支部会が擁する数多くの学問分野を背景とする会員各位の要請をカバーすることが現状より困難になる。この点に関しては、1回の総会会期を十二分に活用することで、克服できるとも考えられる。

3) 総括

平成12年度より、支部総会を1回にすることは、支部の活性化にとってはむしろ好条件となると考えられる。

4) 支部会員の意見を広く吸収する総会シ

システムの提案

総会の学術的内容を決定する際に、総会長の責任がきわめて大きいことを確認した上で、総会長と評議員会の選任によるプログラム委員会の設定など、できるだけ広く支部会員の意見を吸収するシステムを採用することが今後の検討課題として提案された。

4. 学術集会委員会報告

支部総会の統一化が会務総会において承認された場合に、それを実行に移すための支部会則の変更案が提案され、了承された。

5. 支部総会統一化についての評議員会での討議

- 1) 将来計画委員会報告について討議され、支部総会を年1回に統一化することが望ましいとの意見が支持された。
- 2) これまでの春の支部総会に代わって不定期の関東支部主催の研究会やシンポジウムを企画することが提案され、今後の検討課題とされた。
- 3) 支部総会の一本化に関しては、支部総会時の会務総会で会員による承認を受ける必要があり、以下の手順で進めて行くことが了承された。支部ニュース第32号で全会員に支部総会の一本化案を広報し、広く意見を求める。その結果をふまえて、第80回関東支部総会会務総会（平成10年11月25日）において審議事項として提案し、審議する。

（本議事録は平成10年8月14日に評議員回覧により承認されました。）

〈訂正のお知らせ〉

支部ニュース第31号に掲載の「受賞のお知らせ」のうち、平成8年度浅川賞の受賞演題に誤りがありましたので以下のように訂正（下線部）し、お詫びいたします。

平成8年度浅川賞受賞

久恒和仁 城西大学薬学部微生物学教室
「ビブリオ科細菌、とくに *Vibrio cholerae* と腸炎ビブリオのリポ多糖体の化学的、免疫化学的性状と化学分類に関する研究」

【編集後記】

明けない梅雨と集中豪雨に悩まされているうちに今年の夏も終わり、再び支部ニュース発行の時期を迎えました。本号では支部総会についての支部長提案を掲載しています。ニュース後半部の評議員議事録と合わせて読んでいただき、支部総会の今後の在り方についてお考えいただければと思います。なお、編集委員会では毎回全力で編集に取り組んでいますが、本号の紙面でおわकारの通り、まだまだ反省点が多いようです。お気づきの点は今後ともどうかお気軽に支部事務局までご連絡下さい。 (K. K.)

日本細菌学会 関東支部ニュース 第32号

(1998. 9. 30)

発行：日本細菌学会関東支部

〒162
-8666 東京都新宿区河田町8-1

東京女子医科大学

微生物学免疫学教室内

支部長 内山竹彦

編集責任者 川原一芳

Tel 03-3353-8111 (内線22713)

Fax 03-5269-7411
